

IF関数で成績処理案づくり

私たちは、いちいちの学習活動で、その評価規準に照らして「A・B・C」をつけますが、その基準を数値として設定できれば、成績処理の手間は随分軽減されるはず。このとき役に立つのが、「IF関数」です。【IF関数は、IF文とも呼ばれます】

コンピュータで成績を処理するときには、「感覚」や「思い込み」を排除し、「数値化」（「資料化」）で行います。場合により数値化は難しいこともありますが、通知表に表すという目的は、要するに数値化です。教科や活動により、教師の鋭敏な「センサー」が数値化の拠り所となることは言うまでもありません。

たとえば、基準の数値として、つぎのようなハードルを設定するとします。

40点を越えたら「B」、それ以下は「C」

これを処理してみましょう。

IF関数の構文は、次の通りです。

IF文1つで判断できるのは、1つの条件のみです。

=if(判定条件, 真【条件が当てはまる場合の処理】, 偽【当てはまらない場合の処理】) ですから、先ほどの条件を式に表せば、

=if(A1>40,"B","C")

【読み方】

IF文の開始宣言



「もし、セルA1が40を越えていたら」

「Bを表示します」

「でも、そうでなかったら、Cを表示する」

「B」ではなく、「"B"」とあるのは、文字列として扱うからです。Excelで関数の結果として文字列を表示させたいときには、このようにダブルクォーテーションでくくります。ダブルクォーテーションは、「Shift」を押しながら「2」キーを押すと出てきます。

=if(A1>40,B,C)

この場合は、エラーになります。

=if(A1>40,20,10)

エラーではありません。結果は、「数値」として表示されます。

=if(A1>40,"20","10")

エラーではありませんが、結果は「文字列」として表示されます。

見た目は同じでも、数値かそうでないかは重要です。数値には大きさがあり、比較・演算ができますが、文字列はそういうわけにはいきません。出された結果をもとにさらに演算がしたい場合は、ダブルクォーテーションは外しておきましょう。

IF文のネスト

=if(A1>40,"B","C")だけでは、実際には使い物になりません。条件は1つではないからです。AとBとCに分岐させるためには、IF文を入れ子構造にします。読んでみて下さい。

(例) =if(A1>80,"A",if(A1>40,"B","C")) ← 線部が「偽」の処理です